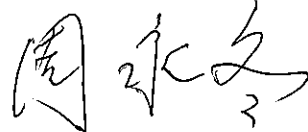


2006年(ワ)第6484号 謝罪及び損害賠償請求事件  
原告 王子雄 外39名  
被告 日本国

## 意見陳述書

2008年12月3日

東京地方裁判所民事第13部 御中



中華人民共和国重慶市万州区鞍子壩18号3階

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 周 永冬

1、私は周永冬と申します。1929年11月8日に生まれました。重慶生まれで重慶育ちです。現在は万州区鞍子壩18号に住んでいます。重慶市万州区柑果ステーションを退職しました。妻幸世蓮は無職で、主婦です。

2、70年前の1937年7月7日から1945年8月15日まで、日本軍国主義は中国に対して長さ8年にわたる侵略戦争を行いました。そのなかで、重慶もまた1938年から1942年までの5年半にわたって日本軍に爆撃され、私の家族も災難を免れませんでした。

日本機が1938年旧暦9月に浮屠関を爆撃した際、銅元局の我が家の一室が倒壊し、私は崩れてきた家に押し潰されそうになりました。銅元局は危ないので、一家全員で南岸区海棠溪の向家坡張家槽坊に引っ越し、方という人の8室を間借りしました。

当時、私の家族は11人で、父周国元(当時56歳)、二番目の叔父周国邦と叔母の周張氏、三番目の叔父周国軍と叔母、長兄周永福(当時31歳)、次兄周永禄(当時28歳)、三兄周永寿(別名は周易隆、当時24歳)、長姉周永恵(当時20歳)、次姉周永珍(当時16歳)と私(当時15歳)の11人でした。

私の父は一族の同じ世代のなかでは、一番年上で、母の周段氏は私を生んで数ヶ月後に亡くなりました。南岸区海棠溪の向家坡張家槽坊に引っ越ししてから、父は方という地主から借家をし土地を借りて主に農業で生計を立て、私たち子どもを養ってくれました。生活は豊かではなかったのですが、私は学校に行けず、家で父に文字を覚えてもらいながら農業の手伝いをしていました。一家は揃って穏やかに暮らしていたと言えま

す。しかし、このような生活は 1940 年 8 月 9 日の日本軍の爆撃で終わりを告げました。

3、1940 年 8 月 9 日のことは現在でもはっきりと覚えています。午後 2 時頃、17、8 機の日本機は重慶の上空に突入し、江北から揚子江を越え、南岸上空に入り、海棠溪烟雨堡から羅家壩、向家坡の方に向かって爆弾を 20、30 発投下しました。この爆撃で、私の家は瓦一枚残らないという壊滅的な打撃を受けました。

爆撃のその日、昼食を食べているとき、空襲警報を聞き、一家はいそいで避難しました。私は長兄周永福、三兄周易隆と従兄は周永倫、山麓の高さ約 1 m の石圈墳に逃げました。その石圈墳には 10 数人ぐらい入ることができました。(当時爆撃から避難した石圈墳はすでに取り払われ、畑になっています。) 長兄周永福と三兄周易隆は山麓の下に、周永倫と私は墓の上部にいました。飛行機が飛んでくるのが見えましたが、避難するいとまがなく大きなエンジュの木の下に隠れ、地面に伏せていました。しばらくして緊急空襲警報が響き、私は地面に顔をつけていました。周永倫はエンジュの木を抱きかかえていました。すぐに飛行機が頭上にきて爆弾を投下しました。坂の土がはね飛ばされ、煙がもうもうと立って周りのものが見えなくなりました。

どこから飛んできたのか爆弾の破片が私の右足に当たりましたが、何がおこったのかわかりませんでした。ただ右膝になにかあるような感覚があり、手で右膝をさわってみると、手がやけるように熱く、ようやく爆弾の破片があたったとわかりました。脚は骨折していましたが、肉がまだ繋がっていて血がどんどん出てきました。爆弾が投下されたから右足が骨折するまであっという間だったので、最初るとき痛みも感じませんでしたし、泣きもしませんでした。飛行機が去って周りの状況がはっきり見えるようになり、兄と従兄の周永倫が駆け寄ってきて、ござに乗せて三里半(南岸区の地名)の臨時に作られた簡易病室に運んでくれました。山麓から下に運ばれるとき、周囲の樹木には吹き飛ばされた肢体や服が引っ掛かっているのが見えました。

簡易病室についた時、すでに 3、40 人ぐらいの爆撃被害者が治療を受けにきていました。医者は、私の傷口を見て、私と三兄に、「傷口がすでに黒変している。爆弾に毒があるので、毒が他に蔓延し、身体他の部分に影響しないように、足を切断しなければならぬ。」と言いました。その時私は痛みを耐えられず、すでに昏倒していました。当日の午後 5 時ごろ、切断手術をされました。目が醒めたとき、右足の膝から

下の部分がすでに切除されているのを知り、当時まだ十歳だった私は、これからはずっと障害者となるのだと思うととてもつらく悲しくなりました。このことで何日もとても悲しい思いをしました。足を切除されたばかりのとき、毎晩、痛みで何度も目が覚め、少しも動けませんでした。病院の環境は悪く薬品も欠乏しており、傷口はなかなか癒えませんでした。1ヶ月余り後、三兄周易隆が私を背負って家に連れて行ってくれました。

4、爆撃後、兄は説明してくれました。「日本機は家のすぐそばに爆弾を2発投下し、家はすべて倒壊し財産もすべてなくなった。父親は当時家のなかにて避難しておらず、崩れた梁が頭に当たり、親切な人に三公里半の簡易病院に運ばれた。医者には脳震盪と診断され、両耳も難聴となった。当時は脳震盪を治療する薬とか手段がなく、一家の生活も困窮したので、やむなくそのまま退院した。」また私と父親のほかにも、二人の姉と三叔父の妻も程度の差はあれそれぞれ負傷しました。私たちが間借りした家の後ろの樋からおよそ3mのところに、小さな防空壕があり、7、8人入ることができました。爆撃のその日警報が響くと、二人の姉と三叔父の妻は、そこへ避難しました。壕は日本機の爆撃により倒壊し、避難していた人が埋められてしまいました。爆撃後、当時その場にいた人たちが急いで掘り出したので、姉と三叔父の妻はようやく助けられ死を免れたのです。その他の叔父やその妻たちは、付近の小屋に避難していて助かりました。二兄は重慶市内のラーメン屋さんで弟子として働いており、爆撃にあいませんでした。

5、爆撃後、羅家壩向家坡の周辺はほぼ廃墟になり、私たちは帰るべき家をなくしました。叔父たちは生活のため出稼ぎにいきました。父は1940年9月末ごろ、私たち兄弟姉妹を連れ4キロメートル離れた立石溝というところに移住しました。そこで家屋や耕地を借りて農業をしました。

父は爆撃後、適時に有効な治療を受けられなかったため、病状はひどいひどくなりました。毎日の正常な生活や仕事ができなくなり、同年の12月26日に亡くなりました。父がなくなり、私は兄らと一緒に生活をしていました。兄が面倒をみてくれましたが、両親がいないため、楽しみがなく、孤独感を感じました。特に、足が不自由となり、棒を使って一歩ずつ歩くのを練習しなければなりません。練習しているとき、どのくらい転んだか数え切れません。7、8か月してようやく、杖を使って片足を支えてなんとか歩けるようになりました。

養生している期間は、障害があるため、ほとんどなにもすることができず、家の負担となったので、とても心苦しかったです。障害者にはなつたけれど、一生このまま人に頼って生活はできないといつも思っていました。大人たちがいうには、しっかり勉強すれば、見込みがある人間になれ、自分を養うことができるようになります。そこで私は奮い立って勉強することにしました。

1941年、生活はあまり余裕がなかったのですが、兄たちは私を学校に行かせてくれました。しかし、学校は家から4キロメートルも離れており、山道でもあり、毎日学校に行くのに2時間以上かかりました。雨の日や天気が悪い時は、杖は泥のなかにめり込み抜き出せなくなったりしました。三兄に家まで背負ってもらったことも何回もありました。

爆撃後、私たちの生活はきわめて困難になりました。立石溝に移って半年近くは食糧がなかったため、人に借りざるをえませんでした。そして、土地も他人から借りたものなので、できた穀物は地主に渡さねばならず、実際に手元に残る食糧はかなり少なかったのです。私は毎朝、4時に起きて一家のために朝飯を作りました。学校に行っているときは、生活費がないので、一日、2食しか食べられず、昼飯は食べられません。学校を終え、午後6時ぐらい家に帰ってまた家事をして、それからようやく夕食をとれたのです。まだ若い私の手足にたこがいっぱいできていました。冬になっても、厚い冬のコートがなく薄い服を数枚重ねて着て寒さをしのぎました。爆撃以来、1952年に就職するまで、私は新しい服を着たことも無いし、お腹一杯食べたこともありませんでした。

6、1941年から、私は啓智小学校に入り、卒業後東方中学に合格し、不断の努力によって、様々な困難を克服し、小学校・中学校を終えるのは並大抵のことではありませんでした。私の足に障害があり、障害のため健常者の生徒よりずっと多くの苦勞をし、普通の人が思いもかけない困難、困苦を耐え忍んできたのです。爆撃の被害にあってから、家は困窮し、とても学費など払えません。私は刻苦勉励して学び、優秀な成績をおさめたので、私の学費や諸費用を免除してくれたのです。

1951年、私は重華学院会計専攻に合格し、正式な仕事につき、正常に生活の糧をえることができ、ようやく正常な生活ができるようになったのです。私は、身体に障害がありますが、一生懸命勉強して成績が優秀だったので、重華学院在学中、国家が私の生活費をみてくれたのです。学院の会計専攻1年半を終了し、1952年8月西南区の合作事業管理局の仕事に配属され、その後また沙坪壩区の水瓶工場の会計に転属となり財

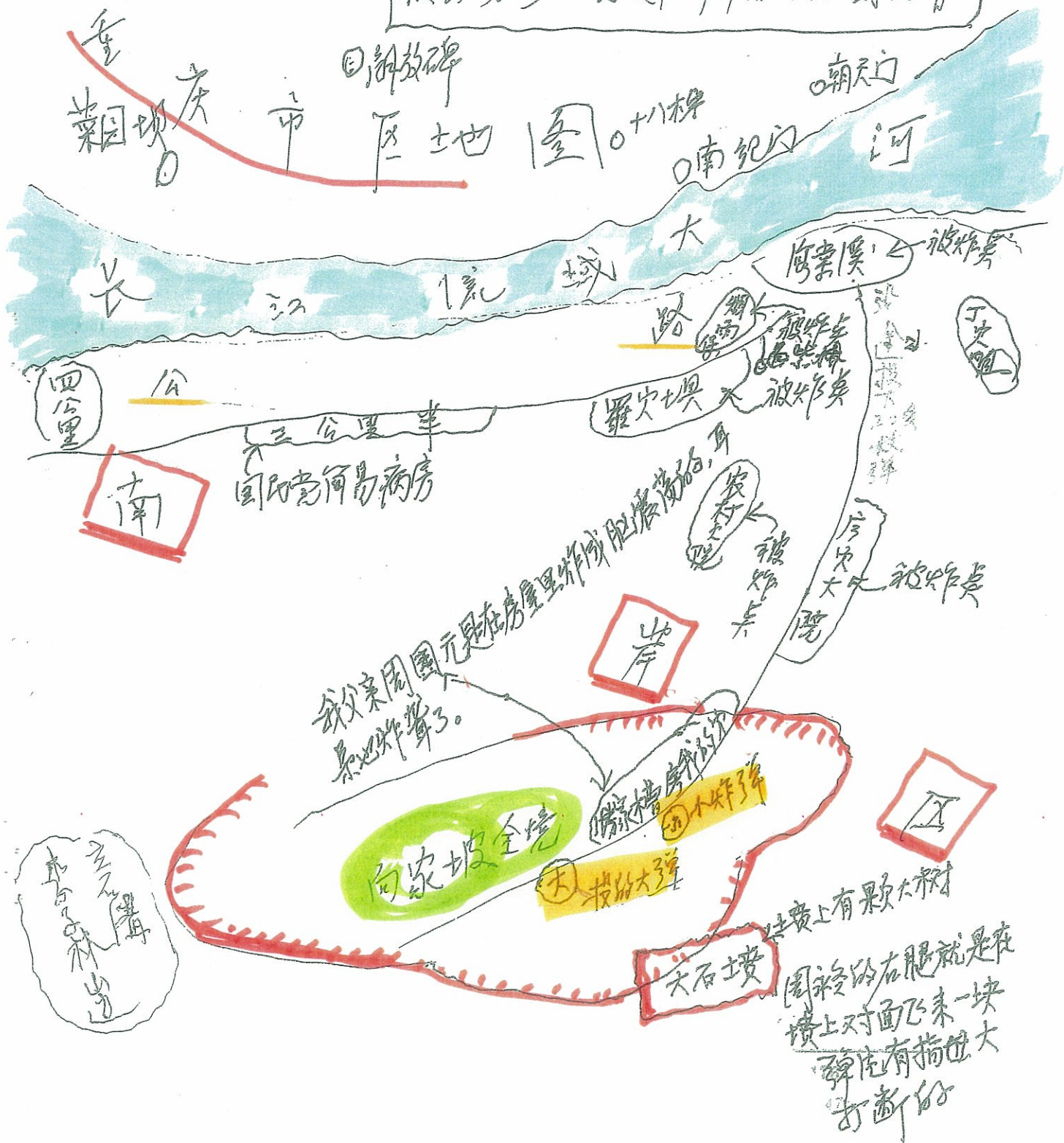
務の仕事をしました。その後のさらに四川省購買販売総社に入りました。私は中級会計士の資格を認められ、四川省購買販売総社から30年勤続の表彰を受けました。連続して8年間「先進工作者」の表彰も受けました。行動をいささかでも便利にするため、1955年2月に義肢をつけました。障害があるので、結婚にも影響し、三十数歳になって、1961年5月にようやく結婚し、自分の家をもてたのです。1985年退職後、生活のため、引き続き18年間外で働きました。

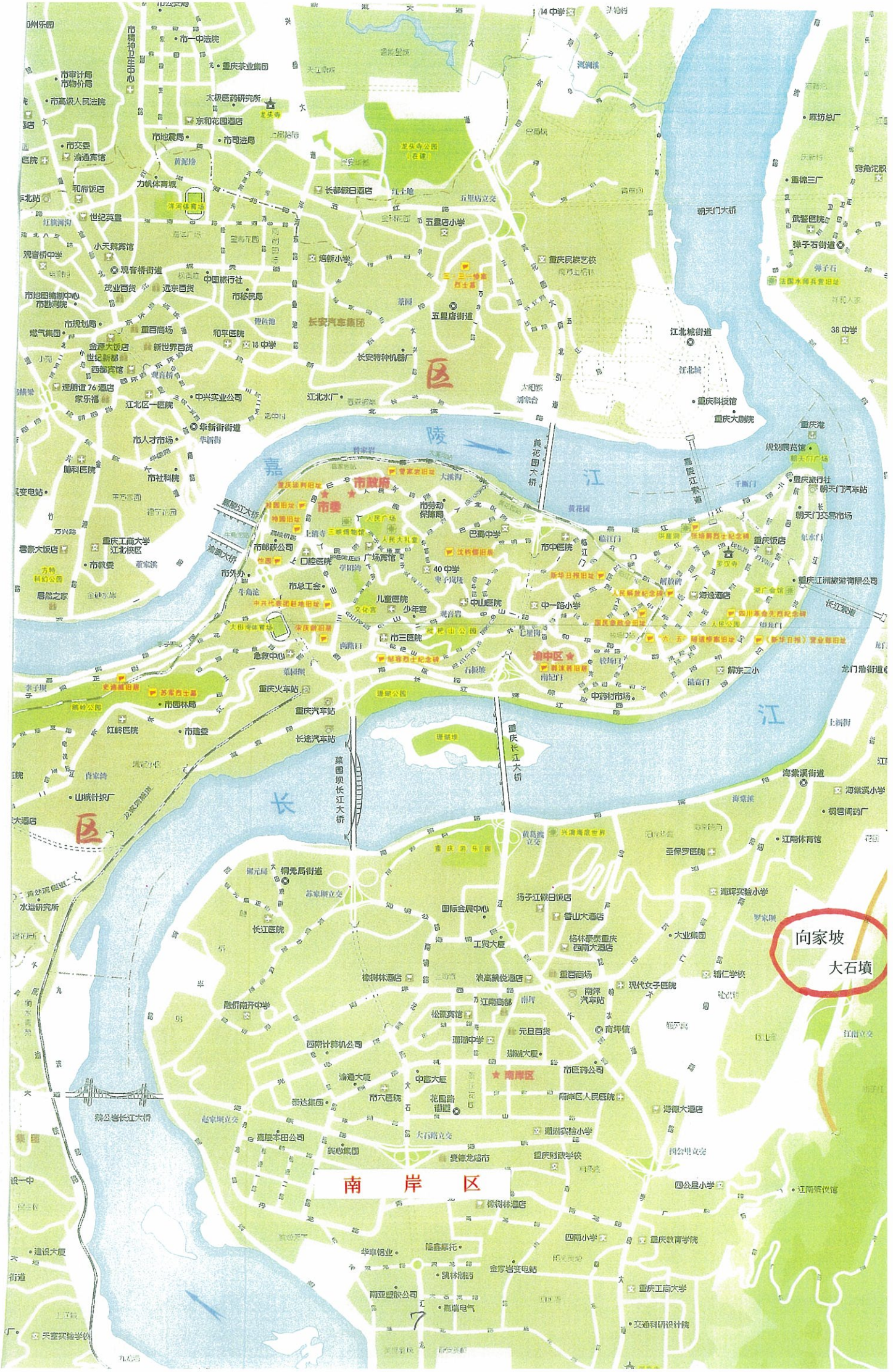
7、1940年8月9日、日本の重慶爆撃は重慶の広範な人々に償いきれない被害をもたらしました。私はその被害をひどく受けた者の一人です。私の右足が切断され、一生の障害となり、爆撃前のように自由ではなくなり、生活がきわめて不便なものになりました。同時にまた私の心身の健康をも大きく傷つけているのです。

あの爆撃で、私は肉体的にも著しく傷つけられ、精神的にも深く痛めつけられ、無情な打撃を受けたのです。60数年来、私は上海などで5回義肢を取り付けました。さらに義肢の修理費用や交通費を加えれば人民元15000元以上になり、経済負担も大きいのです。

私たち被害者は歴史を忘れることはできません。爆撃は私たちに身体的にも精神的にも長期にわたる苦痛をもたらしているのです。私たちは平和を愛し、戦争に反対し、正義を希求します。日本政府が歴史を直視し、被害者に誠実に謝罪し、合理的な賠償をすることを求めます。

# 被灾地区地方划一个平面图说明





南岸区

向家坝  
大石坝









天弹

周围都已建房子了。  
周围各

天炸弹



照片的房子是原老家，屋后隔  
3公尺远的地方，投的小炸弹，把  
整个老房子全部炸毁了，使我家破  
人去，妻离子散。

小炸弹



我的右腿，就是在这圈坟上被炸  
断的，只有大拇指大一块弹壳，不  
知道从那个方向飞来的。因此坟  
全被学校修掉了。

周永宝  
2008.11.24日

石圈坟上  
面对海棠溪